

# 江戸の役人と今の役人

私は昔から歴史小説やテレビの時代劇が好きで、特に以前に放映していた「鬼平犯科帳」は渋くて良かったのですが、その池波正太郎さんの小説が「この日、平蔵が本所二ツ目の軍鶏なべ屋『五鉄』にあらわれたのは五ツ半ごろで……」などと読者に江戸の町中を歩いているような錯覚を与えたのが影響しているのか、最近は本屋で、江戸切絵図を取り上げた本をよく見ます。尾張屋版(金鱗堂)の多色刷の切絵図に解説を付したものとか(「江戸切絵図と東京名所絵」小学館など)、現在の1万分の1の地図に幕末の地割りを正確に重ねたものとか(「復元江戸情報地図」朝日新聞社)、眺めて今と昔を比べていると時間を忘れます。残念ながら当方の住まいは江戸時代は深川沖の海の中でそれ以上空想力の働きようがないのですが、役所の方は確かにちゃんとした場所に立っており、総務庁の統計局は旗本屋敷の跡で、庁舎前の戸山ハイツや国立国際医療センターは尾張藩の下屋敷跡ということが分かります。現在も大久保通りは医療センターの前で妙な曲がり方をしていますが、これも昔、道が尾張藩の屋敷の角を曲がっていた名残りでしょう。

地図だけでなくもう一つ実感が欲しいなと思っていたところ、広重の「名所江戸百景」が出版されていることを知り(「名所江戸百景」集英社など)、それを切絵図と合わせて見ると、本当に3次元、3Dで江戸の世界が時間が止まったように、しかも一種の清涼感を伴って目前に現れてくるではあ

りませんか。広重の「愛宕下敷小路」の雪景色の画を見て、愛宕神社の門の位置と小路の曲がり具合から左側に描かれた式家屋敷が伊勢菰野藩主の土方備中守某の上屋敷というような説明もすぐわかります。もっと科学的にという向きには幕末の各種写真集まで刊行されており、広重の代わりに愛宕山に上って大名屋敷を真下に東京湾を望む絶景を楽しむこともできます(「写真でみる江戸東京」新潮社など)。

地理の関係が一息つくと、当方も公務員を職業としていますので、今度は「もし江戸時代だったら俺は何石取りの侍だろうか」と考えるのももつともでしょう(侍というには正義感や使命感の面で問題なしとはしませんが)。長い間の疑問でしたが、先年、「徳川幕府の会計検査制度」(築地書館)という本を見つけました。明治大学で会計学を教えてられた中瀬勝太郎という先生の本で数年前に復刻されたものです。内容は江戸幕府の会計制度を解説したのですが、当時私は大蔵省主計局に出向していた関係で、特に勘定所の組織に興味を持ったわけです。勘定所は、幕府の財政運営、幕領の租税徵収と訴訟に当たるもので、宝暦年間では5人の勘定奉行の下に勘定組頭12人、御勘定134人、同見習12人、支配勘定93人という陣容でした。勘定組頭はそれぞれ担当を持ち、建制順に言うと、御殿詰、御勝手方、御取箇方、新田方、伺方、知行割、帳面方、道中方、御林方、御証文諸帳面取調方、評定所方、御勘定吟味方です。12人と言え

総務庁統計局統計基準部調査官

## 菅 宣 紀

ば今の主計官も12人、御殿詰といふのは江戸城中の上勘定所に詰めて財政の一切を統括するというのですから、今の主計局でいえば総務課長か企画担当の主計官、御勝手方といふのは金銀の支払いや切米支給などが役割で言わば司計課長、御取箇方といふのは「諸国堤川除御普請御廻米運送夫食種貸等……」と難しいのですが、文字面からは公事事業担当主計官、あと若干ありますが、昔も人も財政当局の組織は相通ずるところがあるようです。また、御勘定は今の主査、私は普通の補佐でしたので支配勘定というところでしょうか。日本史総覧(新人物往来社)の江戸幕府職制表を見ると、局長級の奉行は別として、勘定組頭の役高は350俵、御勘定は150俵で旗本である御目見以上はここまで、支配勘定は100俵で諸代席の御家人になることが分かります。

さらに、「江戸時代御家人の生活」(雄山閣)を見ると、この程度の御家人は、家は組屋敷(言わば官舎)で一戸あたり100から300坪、「旦那様」「奥様」と呼ばれて、そこまでは結構なのですが、経済面では「百俵6人泣き暮らし」とかなり窮乏していたようです。有名な安永・天明期の文人(作品は読んだことはありませんが)大田南畝は、牛込の御徒(おかち)の家に生まれ、若い頃は江戸の文人でもスター的存在だったそうですが、寛政の改革で弾圧されるのを恐れて狂歌・戯作を諦め、中年で学問吟味の試験を受けて支配勘定に登用され、75歳で死ぬまでその職にありました。身分制

の中でも勘定所は他と違い、能力次第で相当上位の官職に上ることがあり、彼自身も学問吟味首席合格で能力はあったようですが、現代でもあるように役所以外の活動が睨まれて出世はせず、子供の病気もあり隠居もできなかったのです(「大田南畝」吉川弘文館)。

いろいろ見くると、江戸時代の役人も現在の役人と生活意識・職業意識の面でどれほどの違いも無いような気がします。無役の小普請組の者が御番入りのため組頭に日参する様子は、子母沢寛の「父子鷹」に出てきますが、ポストと昇進というのは現代の役人でも泣きどころです。江戸時代のように社会変動がない状態、高度成長期のように黙っていても全体のパイが増加する時代ならば、ポストと昇進が役人最大の関心というのも国民にとっては無害で良いのでしょうが、幕末の動乱期に殆ど働くことがなく、明治になって極端に零落した旗本・御家人に、昨今の激動の時代における自らの姿を合わせ見るというのは、只の考え方とも言えないでしょう。